

# 姫路城城下町跡

—姫路城跡第351次発掘調査報告書—

平成29年(2017年)3月

姫路市教育委員会

## 序

姫路城は、本市の象徴であるとともに、我が国を代表する文化遺産の一つです。江戸時代初頭、池田輝政によって五重六階、地下一階の連立式天守が築かれて以来、400年を経た今でも威容を誇っています。近年、5年を要した保存修理工事が完了し、「白鷺城」と呼ばれるに相応しい白亜の大天守が姿を現したことでの話題となりました。

姫路城を聞く城下町は、天守のある姫山を中心に螺旋状に巡らされた三重の堀によって、天守をはじめとする城の中核の置かれた内曲輪、武家屋敷が立ち並んだ中曲輪、町人地や寺社を中心とした外曲輪に区別されています。現在、内曲輪・中曲輪の大半が世界遺産及び、国の特別史跡として登録・指定され保護・顕彰が図られるとともに、外曲輪では、姫路市の中心地として中核市にふさわしい街づくりがなされています。

今回、外曲輪の北条口二丁目において武家屋敷地の発掘調査を実施し、数多くの遺構を確認することができました。

ここにその調査成果を報告し、姫路城跡の調査・研究の発展に資する所存であります。

最後に、事業の実施にあたり、多大なご協力を賜りました和田興産株式会社、その他関係者各位に心から御礼申し上げます。

平成29年(2017年)3月31日

姫路市教育委員会

教育長 中杉 隆夫

## 例　　言

1. 本書は、姫路市が和田興産株式会社の委託を受け、姫路市北条口二丁目35番地において実施した姫路城城下町跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の実施ならびに本報告書の刊行に際しては、和田興産株式会社に多大なるご協力を頂いた。また、現地作業は安西工業株式会社が、空中写真測量は株式会社アコードが実施した。
3. 現地調査及び整理作業、報告書の編集は、姫路市教育委員会 生涯学習部 埋蔵文化財センターが実施した。
4. 発掘調査で得られた出土遺物、図面、写真等は姫路市埋蔵文化財センターにおいて保管している。

## 凡　　例

1. 姫路城跡は、文化財保護法により「特別史跡姫路城跡」と周知の埋蔵文化財包蔵地である「姫路城城下町跡」に区分されている。調査次数については、これを区別せず「姫路城跡第〇次」としている。
2. 発掘調査で行った測量は、世界測地系（測地成果2000）に準拠する平面図直角座標系第V系を基準とし、数値はm単位で表示している。
3. 本書で用いる標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、使用する方位は世界測地系の座標北である。
4. 遺構の略称は、文化庁文化財部記念物課監修の『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編一』記載の略号を使用し、以下のように呼称している。  
SB：掘立柱建物跡、SK：土坑、SE：井戸、SP：柱穴・小穴、SD：溝、SA：柱列跡
5. 遺構・土層等の呼称は、調査時の遺構番号を基本とするが、整理に際して変更したものもある。
6. 土色と土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編2003『新版 標準土色帳 25版』日本色研事業株式会社に準拠した。
7. 遺物の計測値と観察所見は観察表を作成し、まとめている。法量は、残存率が1/4未満の部位に関しては、（ ）を付けて復元した数値を示している。
8. 遺物番号は基本的に通し番号とする。
9. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・写真ともに一致する。

## 目 次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯と体制	1
第2節 調査の経過	2
第3節 遺跡の位置と環境	2
第2章 調査の成果	3
第1節 基本層序	3
第2節 江戸時代の遺構・遺物	3
第3節 江戸時代以前の遺構・遺物	5
第3章 総括	7

## 表目次

表1 遺物観察表

## 図版目次

図版1 図1 調査位置図	図版8 図8 挖立柱建物跡 (SB01)・柵列跡 (SA01) 平・断面図
図版2 図2 調査区断面図	図版9 図9 柵列跡 (SA02) 平・断面図
図版3 図3 江戸時代遺構平面図	図版10 図10 遺物実測図①
図版4 図4 溝 (SD01・SD02・SD04) 平・断面図	図版11 図11 遺物実測図②
図版5 図5 溝 (SD03) 平・断面図	図版12 図12 遺物実測図③
図版6 図6 江戸時代遺構断面図	
図版7 図7 江戸時代以前の遺構平面図	

## 写真図版目次

写真図版1	写真1 調査区全景(南東より)
写真図版2	写真2 江戸時代の遺構完掘状況(東より)
写真図版3	写真3 SD02(西より) /写真4 SD01～SD03土層断面(A-A') /写真5 SD01～SD03土層断面(B-B') 写真6 SD01～SD03土層断面(C-C') /写真7 SD03土層断面(D-D') /写真8 SD10 土層断面/ 写真9 SK08 土層断面(A-A')
写真図版4	写真10 SB01・SA01(南東より) /写真11 SB01-SP20土層断面 /写真12 SB01-SP21 土層断面/写真13 SB01-SP22 土層断面/写真14 SB01-SP23土層断面/写真15 SB01-SP25 土層断面/写真16 SB01-SP26 土層断面/写真17 SB01-SP27 土層断面/写真18 B01-SP28土層断面/写真19 SB01-SP29 土層断面
写真図版5	写真20 SA01-SP11土層断面/写真21 SA01-SP12土層断面/写真22 SA01-SP13土層断面/写真23 SA01 -SP14土層断面/写真24 SA01-SP15土層断面/写真25 SA01-SP16土層断面/写真26 SA01-SP17土層 断面/写真27 SA01-SP18土層断面/写真28 SA01-SP19土層断面/写真29 SB01-SP20/写真30 SB01- SP22/
	写真31 SB01-SP24/ 写真32 SA01-SP11/写真33 SA01-SP14/写真34 SB01-SP16
写真図版6	写真35 SA02(東より) /写真36 SA02-SP01土層断面/写真37 SA03-SP03土層断面/写真38 SA02-SP04 土層断面/写真39 SA02-SP05土層断面/写真40 SA02-SP06土層断面/写真41 SA02-SP07土層断面/写真 42 SA02-SP08 土層断面/写真43 SA02-SP09 土層断面/写真44 SA02-SP10土層断面
写真図版7	写真45 丁銀形土製品(SK08出土) /写真46 SK08出土遺物/写真47 SK15出土遺物/写真48 SK65出土遺物/ 写真49 SB01出土遺物/写真50 SA01出土遺物/写真51 SK108出土遺物/写真52 石礫(SP14出土)

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯と体制

姫路市北条口二丁目35番地において集合住宅の建設工事が計画された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（県遺跡調査番号：020169）に含まれている。

事業者より文化財保護法第93条に基づく届出が提出されたことから協議を行い、遺跡の包蔵状況を確認するために確認調査を実施することになった。平成28年（2016年）1月28日に敷地内において6箇所の試掘坪を設定し確認調査（姫路城城下町跡第350次）を実施した。その結果、全ての試掘坪において遺構・遺物が確認された。

確認調査の結果から、計画地において遺跡が良好に残存していることが判明した。このことから、和田興産株式会社と姫路市で委託契約を締結し、兵庫県教育委員会からの発掘調査の通知に基づき、工事の掘削により遺跡が破壊される建物建設部分を調査対象として本発掘調査を平成28年（2016年）3月15日から開始した。

現地調査開始から整理作業終了までの体制は、以下のとおりである。

平成28年3月31日まで

姫路市教育委員会	係長 岡崎政俊
教育長 中杉隆夫	係長 森 恒裕
教育次長 八木 優	技術主任 小柴治子
生涯学習部	中川 猛
部長 植原正則	福井 優
文化財課	主事 小林啓祐
課長 花幡和宏	技師 黒田祐介
係長 大谷輝彦（調整）	関 梢（調査担当）
技術主任 南 憲和（調整）	嘱託職員 香山玲子、田中章子、玉越綾子、野村知子、三輪悠代
埋蔵文化財センター	臨時職員 黒岩紀子、清水聖子、寺本祐子、藤村由紀
館長 秋枝 芳	

平成28年4月1日から

姫路市教育委員会	係長 森 恒裕
教育長 中杉隆夫	技術主任 小柴治子
教育次長 八木 優	中川 猛
生涯学習部	福井 優
部長 植原正則	関 梢（調査・整理担当）
文化財課	主事 小林啓祐
課長 花幡和宏	技師 黒田祐介
課長補佐 大谷輝彦（調整）	嘱託職員 香山玲子、田中章子、玉越綾子、野村知子、三輪悠代、黒岩紀子、清水聖子、松田聰子
技術主任 南 憲和（調整）	
埋蔵文化財センター	
館長 前田光則	臨時職員 寺本祐子、藤村由紀、秋枝 芳
課長補佐 岡崎政俊	

## 第2節 調査の経過

本発掘調査に際して、姫路市と和田興産株式会社との間で委託契約を結び、姫路市埋蔵文化財センターが調査を実施した。調査対象は集合住宅建築工事により地下の遺構・遺物に影響が及ぶ範囲とし、調査面積は555m<sup>2</sup>である。平成28年3月15日から発掘調査を開始し、盛土については主に重機による掘削を行った。重機掘削と並行し、遺構検出を行った部分から順次人による掘削を開始した。平成28年4月13日に江戸時代の遺構の全景写真撮影を行い、その後、江戸時代以前の遺構の調査を順次行い、全ての遺構が完掘された状態で平成28年5月12日に全景写真撮影を行った。その後、空中写真測量を行った。平成28年5月14日に現地説明会を実施し、約90名の参加を得た。平成28年5月18日に現地調査を完了した。現地調査完了後は姫路市埋蔵文化財センターにおいて整理作業を行い、本書の刊行をもって事業を終了した。

## 第3節 遺跡の位置と環境

### 1. 地理的環境・歴史的環境

姫路城城下町は、17世紀に池田輝政によって形成され、姫路城を中心に内堀、中堀、外堀の3つの堀で分けられた内曲輪、中曲輪、外曲輪で構成されている。内曲輪は城主の居城であり、中曲輪には家老などの中・上級武士の邸宅が置かれた。一番外側に位置する外曲輪には、東側を南北に伸びる但馬道と、南部を東西に伸びる山陽道を中心に町人地が広がり、その外側に寺地や下級武士等の屋敷地等が置かれることにより防御面にも配慮した地区割りとなっている。今回の調査地が位置する北条口二丁目は、姫路城城下町の南東、北条口門の北東に位置する。調査地周辺の街路の主軸は、N21°Eであり、これは飾磨郡における条里地割の方位と合致するものである。また、この地割が城下町の縁辺部において確認されることなどから、条里地割を踏襲する形で城下町が形成された場所であるとの考察がなされている（堀田1988）。

調査地は幡念寺の南側の武家屋敷地に位置し、周辺は南北方向に延びる街路から東西方向に屋敷地割がなされている。『姫路侍屋敷図』（寛延4年（1751年）～宝曆4年（1754年））を元に当時の地割を現在の地図上に復元した『姫路城跡（城郭図）』から、今回の調査区が2軒の屋敷地にまたがっていることが確認できる（図1）。

また、姫路城下町については絵図が数多く残されており、それら絵図から当該地に居住した人物の氏名を確認することができる。その中で主だったものを時代順に記載する。

第一次柳原氏時代（慶安2年（1649年）～寛文2年（1667年）頃）の『姫路御城廻侍屋舗新絵図』には、南側の街路から幡念寺の間の武家屋敷地は5軒であり、調査地は南から3軒目と4軒目「堀内与五兵衛」と「服部彦右衛門」の屋敷地にある。第二次本多氏時代（元禄11年（1682年）～宝永元年（1704年））の『本多藤原政武公御時代播州郷東郡国衙庄姫路絵図』では当該地の武家屋敷地は4軒となり、南から2軒目と3軒目「中野四郎兵衛」と「下山半兵衛」の屋敷地にあたる。第二次柳原氏時代（宝永8年（1711年））の『播州姫路御城下之図』では6軒の武家屋敷地が確認でき、当該地の武家屋敷地には南側には「ウルシハラ」、北側には「斎藤」と記されている。酒井氏入封初期（寛延2年（1749年頃））の『白鷺城旧図』では、当該地の南側が「小屋佐野衛門」、北側が「藤原小一衛門」と記されている。酒井氏時代中期（18世紀後半頃）の絵図である『姫路侍屋敷図』では、当該地には6軒の武家屋敷地の記載があり、当該地の北側の屋敷地には「小屋藏之助」との記載が見られるが、南側の土地は空白となっており居住者の氏名は確認できない。文化3年（1806年）の『姫路城下町絵図』においても、当該地には6軒の屋敷地が確認でき、一番北に位置する屋敷地は「幡念寺持」と記されている。調査区が位置する武家屋敷地は南から3軒目と4軒目にあたり、南が「荻原市弥」、北が「増尾喜多八」の屋敷地と記されている。（姫路市1986・1996・1999）

## 2. 既往の調査

姫路城跡では、確認調査や立会調査を含めてこれまでに350次の調査が行なわれており、今回の調査が第351次にある。

調査区周辺における近年の調査では、調査区の南に位置する外堀で発掘調査が実施されている。区画整理事業に伴う発掘調査（姫路城跡第238次）では、北条口門の楕形部および、その北側の外堀の隅角部が良好に残存しているのが確認された。朝日町で行われた民間開発に伴う発掘調査（姫路城跡第334次）でも外堀の北側の石垣が良好に残存していることが確認された。

調査区のすぐ東側で行なわれた内環状東線の拡張工事に伴う発掘調査（姫路城跡第327次）においては、町屋地と武家屋敷の境界となる溝が確認され、江戸時代以前の遺構としては掘立柱建物跡が確認されている。また、調査区の北東にあたる平野町で行なわれた発掘調査（姫路城跡第338次）では、石敷きの遺構や石を組み合わせた礎石などの江戸時代の遺構が確認された。その下層では溝から多量の古代の瓦が出土したほか、径約1.5mを測る大型の柱穴が確認されたことから、古代における瓦葺きの大型建物の存在が想定されている（姫路市教育委員会2017a）。このほか、調査区の北西にあたる綿町で行なわれた調査（姫路城跡第343次）においても多量の古代の瓦が出土している（姫路市教育委員会2017b）。

このように、近年における姫路城城下町跡での発掘調査では、江戸時代の城下町に関連する遺構のみならず、その下層において江戸時代以前の遺構の確認例も増加している。

## 第2章 調査の成果

### 第1節 基本層序

基本層序は、盛土（第1層）、江戸時代の整地層（第2層）、中世耕土層（第3層）、黄褐色粘質土層（第4層・地山）である。第4層の下層には砂礫層が続き、これを第5層とする。今回の調査では第4層上面で遺構を検出した。遺構面の標高は約11.5mを測る。

### 第2節 江戸時代の遺構・遺物

江戸時代の遺構は、土坑・溝・ピットなどを確認した。以下、主だった遺構について記述する。

SD01（図4） 調査区北西に位置し、東西方向に延びる溝である。幅0.3~0.5m、深さ約0.1m、東西方向に約15m分を検出した。本来は、調査区東端まで伸びていたと考えられるが、後世の攪乱により東側部分は残存していない。埋土からは、図10-1・2の他、土師器・陶磁器・瓦などが約30点出土している。しかし、大半が細片であり図化に耐えうるものはこの2点のみであった。1は丸瓦である。内面には布目が残る。2は平瓦である。外面上面には布目が残り離れ砂が付着している。このほかに染付の破片が出土している。細片であり時期の特定は困難であるが、江戸時代の範疇に収まるものと考えられる。

SD02（図4） SD01の下層に位置する溝である。幅0.5~1.0m、深さ0.2~0.3mを測る。SD01に比べてやや幅が広く、SD01と同様に東側部分は攪乱により確認することができず、残存長はSD01と同じく約15mである。埋土からは瓦や陶磁器・染付などの遺物が約40点出土しているが細片のため図化に耐えうるものではなかった。時期については特定することが困難であるが江戸時代の範疇に収まるものと考えられる。

SD03（図5） SD01・02の下層に位置する溝である。東西方向に延びているが、調査区中央付近で直角に南に折れ、10mほど直線的に伸びる。溝の規模は幅0.9~1.5m、深さ0.5~0.6mを測る。埋土から

は、図10-3の他、土師器や須恵器の破片が出土している。3は厚手の土師皿である。底部に糸切り痕をもたず、手捏ねで成形されており、口縁部内外面をヨコナデで仕上げている。この他の遺物については、細片であり図化に耐えうるものではなかった。遺物には、染付や施釉陶器等の陶磁器類はまったく含まれていない。

この3条の溝は、現在の敷地の境界ラインとほぼ平行している。また、溝の北側が遺構の空闊地となっている点や、溝から出土した遺物の時期から江戸時代の屋敷境である可能性が高いと考えられる。SD04（図4） SD02の南側に位置し、SD02に平行して延びる溝である。幅0.6~0.7m、深さ約0.2mを測り、途中から南側に湾曲する。しかしながら、江戸時代後期に位置づけられる土坑によって削平されており全容は不明である。遺物が出土していないため遺構の時期を特定するには至らなかったが、埋土等の状況から江戸時代の遺構と考えられる。

SD10（図3） 調査区西端に位置する。SK08（江戸時代の土坑）完掘後に遺構を確認した。幅0.5~0.9m、南北約14mを測り、南北方向に細長く延びる溝である。溝は、SD03の南北方向に延びる部分とほぼ並行しており、主軸はN21°Eである。埋土からは図10-4が1点のみ出土した。4は土師皿で底部に糸切り痕をもち、口縁部がやや内湾して立ち上がる。口縁部内外面はヨコナデで仕上げられている。出土遺物が少ないため時期を断定することは困難であるが、遺構の現況などSD03と同時期の遺構である可能性が考えられる。

SK08（図3・6） 調査区西端に位置する土坑である。東西2.3~2.5m、南北約9.0m、深さ約0.6mを測る。比較的規模の大きな土坑であり、埋土からは図10-5~10が出土した。5は丁銀形土製品である。完形で出土した。表面の上下には「文」の刻印があり、六分割した区画の中央に「大黒天」と「戎天」の刻印が見られる。丁銀形土製品は、これまでの姫路城跡の調査では4例確認されており（姫路市教育委員会2001・2003・2016a, b）、今回出土したものが5例目にあたる。これまでの出土例とは表面の文様のタイプが異なることから、違う型を用いて作られたものであると考えられる。6は土師質の火消し壺の蓋である。7は焰烙D類、8は瀬戸内系の焰烙である。9・10は堺・明石系擂鉢である。このほか、染付、施釉陶器などの陶磁器類も出土している。出土遺物には時期差があるものの、概ね18世紀後半から19世紀に位置づけられる。

SK09（図3・6） 調査区西側に位置する。東西約0.9m、南北約0.4m、深さ約0.3mを測る。遺構から図10-17が出土している。土師質の羽釜であるが、通常の羽釜に比べて小さく、釜形土製品である可能性も高い。

SK15（図3・6） 調査区南西に位置する土坑である。SK32南側に新たに掘り込まれており、南北約1.5m、東西約3.8m、深さ0.5mを測る。遺構の南半部は調査区の外側に及んでいる。SK15からは、図10-11~16が出土している。11は土師皿である。底部に糸切り痕が残る。12・13は火消壺の蓋と壺である。14・15は焰烙H類である。16は堺・明石系の擂鉢である。出土遺物の時期は、概ね18世紀前半から19世紀代に位置づけられる。

SK24（図3・6） 調査区西側に位置する。東西約0.9m、南北約0.9m、深さ約0.2mを測る。埋土から図11-18が出土している。18は底部に糸切り痕をもつ土師皿である。この他、染付や施釉陶器の破片が出土している。概ね江戸時代後期に該当する。

SK27（図3・6） 調査区中央西側に位置する土坑である。SK27は東西約3.0m、南北約2.0m、深さ約0.5mを測る。SSK27からは図11-19~30が出土した。19~21は土師皿である。いずれも底部に糸切り痕が残る。22は土師質の胡麻煎りである。ほぼ完形で出土しており、器体の上面には「胡麻入」の文字と文様が型押されている。23~25は焰烙である。23・24は焰烙H類である。25は瀬戸内系の焰烙である。26は堺・明石系の擂鉢である。27は土師質の火消壺である。28は土師質の焜炉である。底部に3つの脚をもつ。脚の内部は空洞となっている。29は硯である。30は軒丸瓦である。瓦当部に巴文

と珠文をもつ。このほか、染付、施釉陶器などの陶磁器類も出土している。出土遺物の時期は、概ね18世紀後半から19世紀代に位置づけられる。

SK40（図3・6） 調査区西側に位置する。東西約2.5m、南北約1.6～2.3mを測る不定形の土坑である。深さは0.2mを測り、埋土からは図12-31が出土している。31は底部に糸切り痕が残る土師皿である。この他に焰烙や染付などが出土しており、出土遺物の時期は18世紀後半から19世紀代に位置づけられる。

SK60・61（図3・6） 調査区中央西側に位置する土坑である。SK60は東西約2.0m、南北約1.5mの不定形土坑であり、深さは約0.1mを測る。SK61は東西約2.5m、南北約3.5mを測る不定形な土坑である。深さは約0.1mと浅い。SK61の南側中央付近には赤色化し、炭化物を多く含む層が堆積していた。出土した遺物は細片であり図化することができなかった。

SK65（図3・6） 調査区中央西側に位置する土坑である。東西約3.0m、南北約5.0m、深さ0.7mを測る。規模の大きな廃棄土坑である。埋土からは図12-32～34が出土している。32は糸切り痕をもたない厚手の土師皿である。33は底部に糸切り痕を残す。口縁部には煤が付着しており灯明皿として使用されたものである。このほか、染付、施釉陶器などの陶磁器類、瓦などが出土している。出土遺物の時期は、概ね江戸時代中期に位置づけられる。

SK66（図3・6） 調査区中央に位置し、径約1.8mを測る円形の土坑である。深さ約1.0mを測る。埋土からは図12-35・36が出土した。35・36は土師皿である。いずれも厚手で手捏ねで成形されており、底部に糸切り痕はみられない。出土遺物の時期は18世紀後半から19世紀代に位置づけられる。

SK78（図3・6） 調査区中央西側に位置する土坑である。東西約2.0m、南北約1.2mを測る。深さは約0.1mと比較的浅い。土坑の南側部分はSD09によって切られている。埋土からは染付や施釉陶器などが出土したが細片であり図化することができなかった。時期は概ね江戸時代後期に位置づけられる。

SK94（図3・6） 調査区南東に位置する。東西約0.9cm、南北約1.5m、深さ約0.3mを測る不定形の土坑である。埋土からは図12-37が出土した。37は焰烙H類である。このほか染付・施釉陶器などの陶磁器類も多数出土した。出土遺物は18世紀後半に位置づけられる。

SK95（図3・6） 調査区南東、SK94の西側に位置する。東西約2.0m、南北2.0m、深さ約0.5mを測る不定形の土坑である。埋土からは図12-38～40が出土した。38は土師皿である。口縁はやや内湾して立ち上がり、底部に糸切り痕が残る。39は焰烙H類である。40は堺・明石系の擂鉢である。このほか染付や施釉陶器、瓦が出土している。出土遺物の時期は概ね18世紀後半から19世紀前半に位置づけられる。

### 第3節 江戸時代以前の遺構・遺物

今回の調査においては、江戸時代以前の遺構として掘立柱建物跡2棟、柵列跡4列、溝2条、その他土坑やピットを約70基確認した。以下、時期ごとに記載する。

SB02（図8） 調査区中央から西側にかけて検出した遺構である。建物自体は調査区南側に及ぶものである。柱穴を南北方向に4基、東西方向に5基確認した。柱穴は円形を呈し径約0.5m、深さは0.4～0.5mを測る。柱間隔は約2.0mであるが、南北方向の柱列には柱間隔が約1.0mと狭く、庇のつく建物である可能性がある。建物の主軸はN 21° Eであり、条里と主軸を同じくする建物である。

SA03（図8） 調査区北側で検出した遺構である。東西方向に柱穴が並ぶ。調査区西側で円形の柱穴を5基、東側で5基確認した。柱穴は円形を呈し径約0.3m、深さ0.2～0.4mを測る。柱間隔は約1.5mであるが、西側の柵列の東端において柱間隔が2mを測る。柵列の主軸は、N 21° Eである。埋土からは土師器や須恵器の破片が出土したが、いずれも細片であり図化に耐えうるものではなかった。埋土は灰色

を呈し、染付などの江戸時代の遺物が含まれていないことから、中世の遺構であると考えられる。

SB01（図7・8） 調査区南東で確認した掘立柱建物跡である。建物が調査区外に及ぶため遺構の全容は不明であるが、少なくとも3間×2間以上の総柱建物跡と考えられる。全体で10基の柱穴を確認した。建物はN2° Eと正方位に近い主軸を持つ。柱間隔は梁行約1.8m、桁行約1.5mを測る。柱穴はすべて隅丸方形であり、一辺約0.7～1.0mを測る。柱穴の中には柱痕が残るもののが多数あり、柱痕の跡から柱材の大きさは径約0.1mであると考えられる。また、柱穴SB01-SP20は柱材の抜き取り痕跡がみられた。SB01の東側には、同規模の方形掘方をもつ柱穴（図8-SP31）があり、調査区東壁においても同規模の柱穴を確認していることから、SB01と同様な建物がさらに東側にも建っていた可能性がある。柱穴からは図12-41～43が出土した。41は須恵器の杯身の口縁部である。SB01-SP26から出土した。口縁の立ち上がりが低く、カエリの退化もみられる。42は須恵器の杯蓋の口縁部である。柱穴SB01-SP20から出土した。43は須恵器の器台もしくは脚部である。SB01-27から出土した。体部外面には格子状目をもつ。いずれも細片であり時期の特定は困難であるが、概ね古墳時代後期に範疇に収まるものと考える。

SA01（図7・8） 調査区中央から東端位置し、東西方向に延びる柵列である。SA01の主軸はSB01と同様に正方位を指向したものである。柵列は後世の攪乱により柱穴が1基消失しているものの全体で9基の柱穴を確認した。柱穴はいずれも隅丸方形で一辺0.7～1.4mを測る。柱間隔は約2.0mを測る。柱穴には柱痕跡が残っているものが多く、柱材の大きさは約0.1mであったと想定される。柱穴（SA01-SP14）からは図12-44・45が出土した。44は須恵器の器台もしくは脚部の底部である。外面には格子状目をもつ。SB01-SP 48から出土した43と調整や胎土が類似しており、同一個体の可能性も考えられる。45は須恵器の提瓶の口縁部である。いずれも細片であり時期の特定は困難であるが、これ以外に時期の下る出土遺物がない点から、SB01と同じく概ね古墳時代後期の範疇に収まるものと考える。

SA02（図7・9） 調査区中央から西側で検出した柵列である。調査区中央に位置するSK64によって柵列を構成する柱穴の一部が破壊されている。この柵列は、SK64付近に位置するSA02-SP06を角の頂点として北西と南西方向に直角に延びる。柵列の主軸は、N65° Eであり、柱穴は全部で10基確認した。柱穴は円形を呈し径約0.5mを測る。柱穴の深さは、浅いものでは0.1mほどしか残っていないものもあるが、概数約0.5mを測る。10基の柱穴の内8基には柱痕跡が残っており、柱の規模は約0.1mと推定される。柱間隔は約2.4mを測る。柱穴から遺物は出土しておらず、時期については不明である。

SA02の主軸であるN65° Eというラインは、本町遺跡などで確認されている条里地割（N21° E）や播磨国府の地割（正方位）、姫路城築城にともなう地割ラインの主軸とも異なる。近年、本調査区から北西に約400mの場所において行なわれた姫路城跡第343次調査（綿町）において、およそN65° Eの主軸をもつ溝が確認されている。ただ、今回の調査と同様に溝からの出土遺物が乏しく、遺構の帰属時期を特定するには至っていない。今回の調査においても出土遺物がないため遺構の時期を特定するには至っておらず、この主軸を持つ遺構の時期の特定が今後の課題である。

また、SA02の性格を考える上では、調査区中央で柵列が直角に屈曲することから、柵列の西側に区画された空間があったと想定される。しかしながら、調査区西側部分は、近世の遺構が密集しており、SA02と同様の方位をもつ遺構を確認するには至らなかった。

SP30（図7） 調査区南東、SA01の北側に位置する柱穴である。柱穴は径約0.7m、深さ約0.5mを測る。埋土から図12-46が出土している。46は須恵器の杯Bである。時期は奈良時代に位置づけられる。

SK108（図7） 調査区中央に位置する土坑である。東西約1.5m、南北約6.6m、深さは約0.2mを測る。埋土からは図12-47～53が出土している。47は須恵器の壺口縁部である。細片であり時期は特定できない。48は須恵器の杯身である。口縁の立ち上がりが低く、カエリの退化がみられる。49は須恵器の器台である。50は須恵器の杯の底部である。低い高台をもつ。51は須恵器の杯蓋である。52は須

恵器の杯身であり、底部に高台をもつ。53は、丸瓦である。内面には布目痕跡が見られる。出土遺物に時期幅がみられるものの概ね奈良時代後半に位置づけられるものと考えられる。

調査区西側に位置するピット（SP14）から石鎚（写真52）が出土した。石鎚は形状から弥生時代のものと考えられる。出土した遺構は、埋土から弥生時代の遺構とは考えにくく、石鎚自体は遺構とは遊離したものと想定される。今回の調査では、この他に弥生時代の遺構や遺物は確認されず詳細は不明であるが、調査地周辺に弥生時代の遺構があった可能性も考えられる。

### 第3章 総括

今回の調査では、姫路城城下町跡に関連する遺構として屋敷境と想定される溝を確認することができた。また、江戸時代以前の遺構についても良好に残存しており、城下町以前の様相を確認することができた。

#### 1. 武家屋敷地の調査

18世紀中頃、酒井氏代に描かれた絵図『姫路侍屋敷図』をもとに当時の地割や屋敷割を現在の地形図上に推定復元した『姫路城跡（城郭図）』（図1）において調査区内に屋敷境が描かれており、確認調査段階から屋敷境に関連する遺構が検出される可能性が想定されていた。実際に調査を進める中で、現在の地割と平行して延びる溝（SD01・SD02）を検出した。SD01・SD02の北側は江戸時代の遺構の密度が低く空閑地となっていることなどを踏まえ、この溝が屋敷境であった可能性が極めて高いと考える。

これまでの姫路城城下町跡の調査において武家屋敷地の屋敷境を確認した事例は、兵庫県立歴史博物館建設に伴う調査（兵庫県立歴史博物館1985）、西御屋敷跡の調査、イーグレ姫路に建設に伴う調査（姫路市教育委員会2002）の3例にとどまる。また、学校法人淳心学院整備事業に伴う調査では、明確な屋敷境は確認されていないものの、屋敷境が想定される場所が遺構の空閑地となっていることから、屋敷境が溝や築地塀のようなものではなく、遺構として残存しにくい柵や板塀が用いられたのではないかと想定されている（姫路市教育委員会2007）。

そうした中で、今回の調査で確認された溝は、ほぼ同じ位置で作り替えられており、屋敷境が長期に渡り継続して使用されていたことがうかがえる。

また、この屋敷境の主軸はN21°Eと直角に交わっており、今回の調査において江戸時代以前（中世）の遺構と考えられるSB02やSA03と同じく条里地割に沿ってつくられたものであると考えられる。このことは、本調査地の位置する北条口周辺が条里地割を元に姫路城下町の地割が行なわれたという説（堀田1988）と合致するものである。

#### 2. 江戸時代以前の様相

SB01は正方位を志向した主軸を持つ掘立柱建物跡である。遺構の状況から調査区外に建物が続いている可能性が高く、全体像は不明であるが少なくとも3間×2間以上の総柱建物跡であると考えられる。また、SB01のすぐ北側にはSA01が建物と平行して東西方向に並んでいる。調査時はこれらの遺構が正方位に沿った建物である点なのから、播磨国府に関連する遺構であると想定していた。しかしながら、整理作業を進める中で遺構から出土した遺物が、当初想定よりも古い時代のものであることが判明した。出土した遺物は、いずれも細片であり、出土数も限られたものであるが、他の時代に属する遺物が全く含まれない点から、遺構の時期については当初の想定していた時期を遡ると考えられ、古墳時代後期（6世紀後半）に位置づけられる可能性が高い。また、SB01とSA01の柱穴からは同一個体の可能性が考えられる器台の破片（図12-43・44）が出土しており、この2遺構は同時期のものである可能

性が極めて高いと考えられる。

今回の調査によって、古墳時代後期に正方位に近い主軸をもつ建物群が存在していたことが明らかとなった。姫路城跡においてこれまでに確認されている古墳時代の遺構は、西ノ丸の防火用貯水槽建設に伴う工事で勾玉や管玉等が須恵器とともに出土し、原位置を保っていないものの、姫山・鷺山において古墳があった可能性が指摘されている（秋枝1991）。しかしながら、この他に古墳時代の遺構の検出例は少なく、今回の調査成果は、古墳時代の姫路の様相を考えるうえで極めて重要な発見といえる。

### 〈引用・参考文献〉

- 秋枝 芳 1991 「姫路城昭和の大修理の成果と展望（1）－考古資料の再検討－」『姫路市立城郭研究室年報』Vol.1  
姫路市城郭研究室  
九州近世陶磁学会事務局 2000 『九州陶磁器の編年』 九州近世陶磁学会  
白神典之 1992 「堀摺鉢考」『東洋陶磁』第19号 東洋陶磁学会  
中川 猛 2012 「焰烙－姫路と周辺の焰烙－」『山口大学考古学論集Ⅱ』 中村友博先生退官記念論集作成委員会  
姫路市教育委員会 2001 『特別史跡姫路城跡Ⅰ－国立姫路病院更新整備に伴う発掘調査報告①－』  
姫路市教育委員会 2002 『特別史跡姫路城跡－お城本町地区市街地再開発事業に伴う発掘調査概報』  
姫路市教育委員会 2003 『特別史跡姫路城跡Ⅱ－国立姫路病院更新整備に伴う発掘調査報告②－』  
姫路市教育委員会 2007 『特別史跡姫路城跡－学校法人淳心学院整備事業に伴う発掘調査報告書－』  
姫路市教育委員会 2016a 『姫路城下町跡－姫路城跡第328次発掘調査報告－』  
姫路市教育委員会 2016b 『姫路城下町跡－姫路城跡第334次発掘調査報告－』  
姫路市教育委員会 2017a 『姫路城下町跡－姫路城跡第338次発掘調査報告－』  
姫路市教育委員会 2017b 『姫路城下町跡－姫路城跡第343次発掘調査報告－』  
姫路市 1986 『姫路市史』第10巻 史料編近世1 姫路市史編纂委員会  
姫路市 1988 『姫路市史』第14巻 別編姫路城 姫路市史編纂委員会  
姫路市 1996 『姫路市史』第11巻上 史料編近世2 姫路市史編纂委員会  
姫路市 1999 『姫路市史』第11巻下 史料編近世3 姫路市史編纂委員会  
兵庫県立歴史博物館 1985 『特別史跡姫路城跡－兵庫県立歴史博物館建築に伴う発掘調査－』 (財)兵庫県文化協会  
堺田 浩之 1988 「築城プランと基準線」第14巻 別編姫路城 姫路市  
森 恒裕 1991 「淳心学院出土遺物の検討－16世紀後半から17世紀初頭における姫路城下町の様相に関する予察－」  
『姫路市立城郭研究室年報』Vol.1 姫路市城郭研究室

表1 遺物観察表

番号	種別	器種	出土遺構	口径	径深	基高	色調(?)	色調(?)	底成	胎土	保存状況	調整(外)	調整(内)	備考
1	瓦	丸瓦	S001	—	—	—	N3/-	N3/-	良好	±0.3mm以下の砂粒をや多く含む	鑑定済1/1	ナデ	布目地 ナデ	
2	瓦	平瓦	S001	—	—	—	N3/-~N4	N7/-~N8	普通	±0.3mm以下の砂粒を含む	ナデ	ナデ	布目地 ナデ	
3	土師器	皿	S003	(13.4) (38.2) (2.6)	—	—	7SYR98-0	7SYR98-3	普通	±0.3mm以下の砂粒をや多く含む	口縁部1/1	ナデ	ナデ	内面埋付層
4	土師器	皿	S010	(8.0) (3.1)	(2.6)	—	7SYR98-1	7SYR98-3	普通	±0.3mm以下の砂粒をわずかに含む	1/4	ナデ	ナデ	口縁部埋付層
5	土師器	土器皿	S008	—	—	—	10YR98-3	10YR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を含む	完形	ナデ	ナデ	丁羽原土製品
6	土師器	皿	S008	—	(16.8) 3.8	—	7SYR98-0	7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒をや多く含む	1/2	ナデ	ナデ	丸沼遺跡、内面埋付層
7	土師器	鉢	S008	(23.8) —	(5.1)	—	7SYR98-0	7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	E類
8	土師器	鉢	S008	(26.5) —	(8.4)	—	7SYR98-1	7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	1/2	ナデ	ハケ	轟戸内島、内面埋付層
9	陶器	壺	S008	(22.8) (12.4)	7.7	—	10YR98-1	10YR98-2	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	壺-明石系、削り目の單位(1角)
10	陶器	壺	S008	(30.2) (24.6) 12.2	—	—	7SYR98-0	7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	1/4	ナデ	ナデ	壺-明石系、削り目の單位(1角)
11	土師器	皿	S015	(9.7) (10.0) 2.2	—	—	10YR98-2	10YR98-3	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	直面埋付
12	土師器	鉢	S015	(24.8) —	(6.6)	—	7SYR98-0	7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/1	ナデ	ナデ	II類、丹波出先地
13	土師器	壺	S015	(28.5) —	(5.6)	—	2.5YR96-6	10YR98-2	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	ナデ	ナデ	ナデ	内面埋付層
14	土師器	皿	S015	21.8	22.5	2.8	7SYR98-0	7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	完形	ナデ	ナデ	火葬場
15	土師器	大酒盃	S019	—	(16.0) (8.4)	—	7SYR98-0	7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	直面1/4	ナデ	ナデ	火葬場
16	陶器	壺	S015	(24.2) —	(11.8)	—	7SYR98-0	7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	直面埋付	ナデ	ナデ	壺-明石系
17	土師器	皿	S020	(11.8) —	(6.4)	—	2.5YR98-0	2.5YR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	II類
18	土師器	皿	S024	(9.7) 5.8 2.1	—	—	10YR98-2	10YR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	II類、丹波出先地
19	土師器	皿	S027	6.1	4.0	1.0	2.5YR98-2	7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	直面1/4	ナデ	ナデ	口縫埋付層
20	土師器	皿	S027	(9.4) 5.7 1.8	—	—	10YR98-2	10YR98-3	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	直面1/4	ナデ	ナデ	直面
21	土師器	皿	S027	8.5	5.4	1.8	10YR98-2	10YR98-4	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	1/2	ナデ	ナデ	直面埋付
22	土師器	麻袋形V	S027	—	—	—	10YR98-3	10YR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	直面埋付	ナデ	ナデ	直面
23	土師器	壺	S027	(28.0) (8.0) 3.0	—	—	10YR98-2	10YR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	1/2	ナデ	ナデ	直面埋付
24	土師器	鉢	S027	(29.8) 3.0 (4.0)	—	—	10YR98-2	10YR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	II類、内面埋付層
25	瓦	瓦	S027	(40.0) —	(6.8)	—	10YR98-1	10YR98-1	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	ナデ	ナデ	ナデ	轟戸内島
26	陶器	壺	S027	(30.0) (17.8) 12.8	—	—	2.5YR98-0	7SYR98-2	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	壺-明石系、削り目の單位(1角)
27	土師器	大酒盃	S027	—	(14.6) (10.5)	10YR98-4	—	—	普通	±0.3mm以下の砂粒をや多く含む	1/2	ナデ	ナデ	火葬場
28	土師器	鉢	S027	—	(21.0) (15.8)	—	7SYR98-0	7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒をや多く含む	直面1/4	ナデ	ナデ	直面に穿孔あり、内部剥離
29	石製品	鏡	S027	—	—	—	N4/-	N5/-	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	ロウカナデ
30	瓦	丸瓦	S027	—	—	—	N4/-	N5/-	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	直面1/2	ナデ	ナデ	直面
31	土師器	皿	S040	12.0	(8.8) 2.8	—	10YR98-2	10YR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	直面
32	土師器	皿	S049	(11.0) 7.0	2.8	—	2.5YR98-0	2.5YR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒をや多く含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	II類
33	土師器	皿	S055	(8.8) (3.2) 2.3	—	—	10YR98-2	10YR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	直面1/10	ナデ	ナデ	直面埋付
34	土師器	皿	S085	—	—	(2.2)	7SYR98-2	7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/10	ナデ	ナデ	口縫埋付層
35	土師器	皿	S088	(12.6) —	(12.6)	—	7SYR98-2	7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/10	ナデ	ナデ	直面
36	土師器	皿	S088	(12.0) (12.0) 2.8	—	—	7SYR98-2	7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	直面1/10	ナデ	ナデ	直面
37	土師器	皿	S088	—	—	(4.8)	10YR98-4~ 7SYR98-2	10YR98-4~ 7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/2	ナデ	ナデ	II類
38	土師器	皿	S085	(8.0) (8.1) 2.1	—	—	10YR98-2	10YR98-4~ 7SYR98-2	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/2	ナデ	ナデ	直面
39	土師器	鉢	S085	—	—	(6.8)	7SYR98-2	7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	直面1/2	ナデ	ナデ	直面
40	陶器	壺	S088	(14.8) 8.0	—	—	7SYR98-2	7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	1/4	ナデ	ナデ	II類
41	陶器	壺	S088	(32.4) (18.8) 12.8	—	—	10YR98-2	10YR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	壺-明石系、削り目の單位(1角)
42	土師器	皿	S081-26	—	—	(1.8)	10YR98-1~ 7SYR98-1	10YR98-1~ 7SYR98-8	普通	±0.3mm以下の砂粒をわずかに含む	口縁部1/12	ナデ	ナデ	II類
43	土師器	皿	S081-20	—	—	(3.0)	N4/-	N5/-	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	直面
44	土師器	盤	S081-27	—	—	(3.0)	N7/-	N7/-	普通	±0.3mm以下の砂粒をわずかに含む	直面	ナデ	ナデ	斜面文字
45	土師器	盤	S081-14	—	(2.8)	2.5YR97-1	N7/-	N7/-	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/18	ナデ	ナデ	II類
46	土師器	盤	S081-24	—	(4.5)	N6/-	N6/-	N6/-	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	直面1/3	ナデ	ナデ	II類
47	土師器	盤	S081-20	—	—	(3.0)	N7/-	N7/-	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	直面	ナデ	ナデ	II類
48	土師器	盤	S081-27	—	—	(3.0)	N7/-	N7/-	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	直面	ナデ	ナデ	斜面文字
49	土師器	盤	S081-14	—	(2.8)	2.5YR97-1	N7/-	N7/-	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	II類
50	土師器	盤	S081-28	—	(3.0)	(1.4)	N6/-	N6/-	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	直面1/3	ナデ	ナデ	II類
51	土師器	盤	S081-25	—	(1.6)	7SYR98-1	7SYR98-1	7SYR98-1	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	1/4	ナデ	ナデ	II類
52	土師器	盤	S081-18	(28.4) (21.0) (4.3)	N6/-	N6/-	N6/-	N6/-	普通	±0.3mm以下の砂粒を少含む	直面	ナデ	ナデ	II類
53	瓦	丸瓦	S098	—	—	2.5YR98-1	10YR98-8	普通	直面	1/2	ナデ	ナデ	内面埋付	

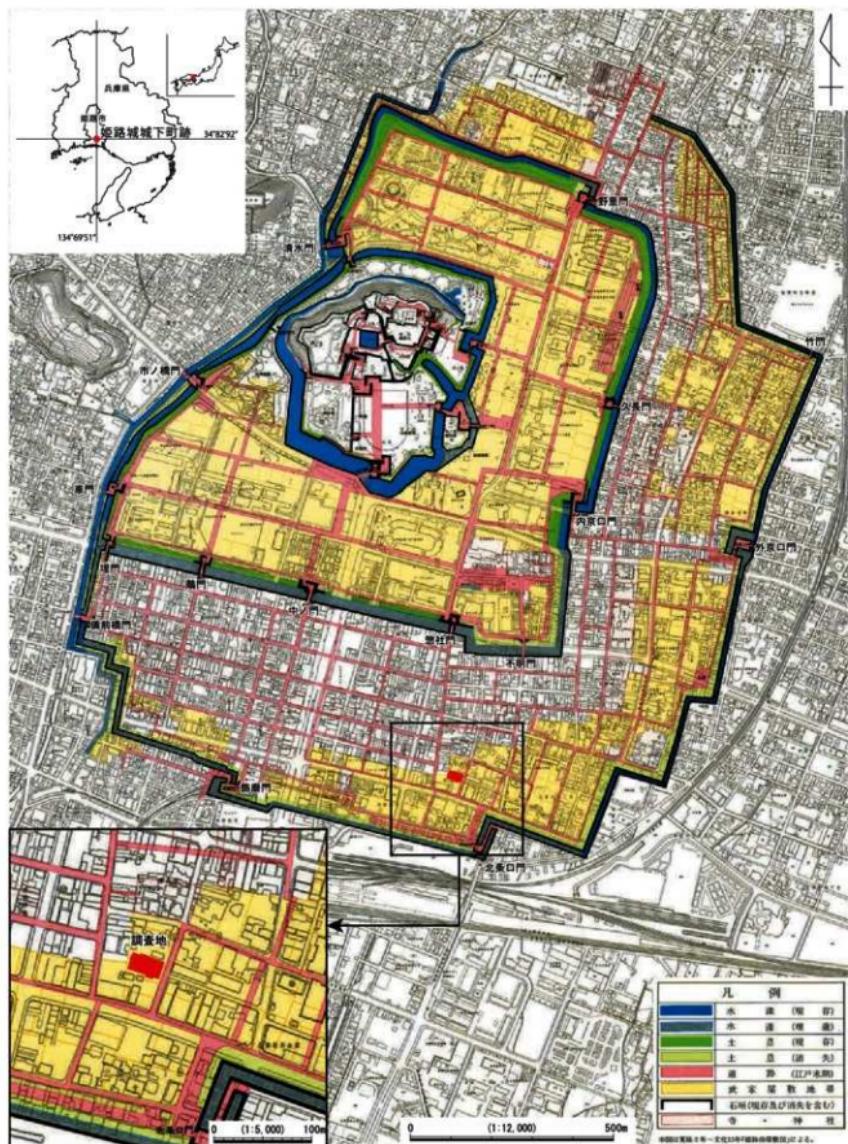


図1 調査位置図

图版 2

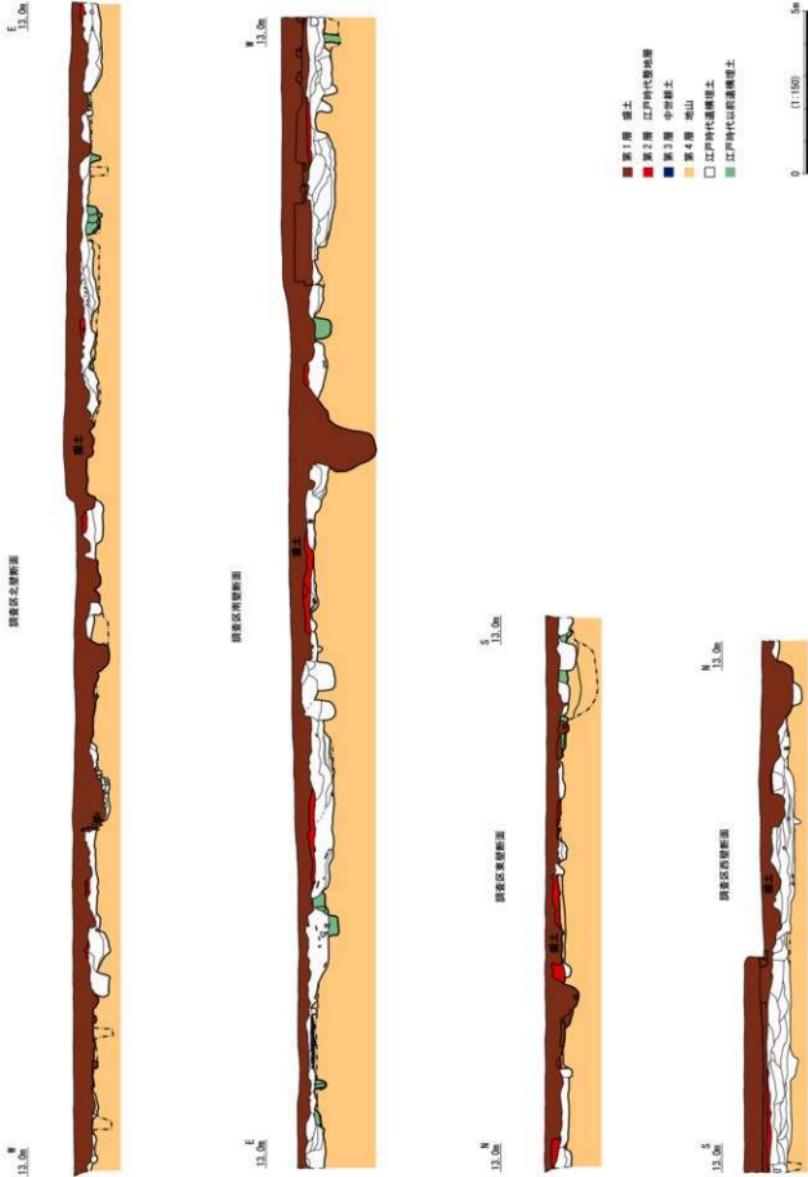


图2 调查区断面图

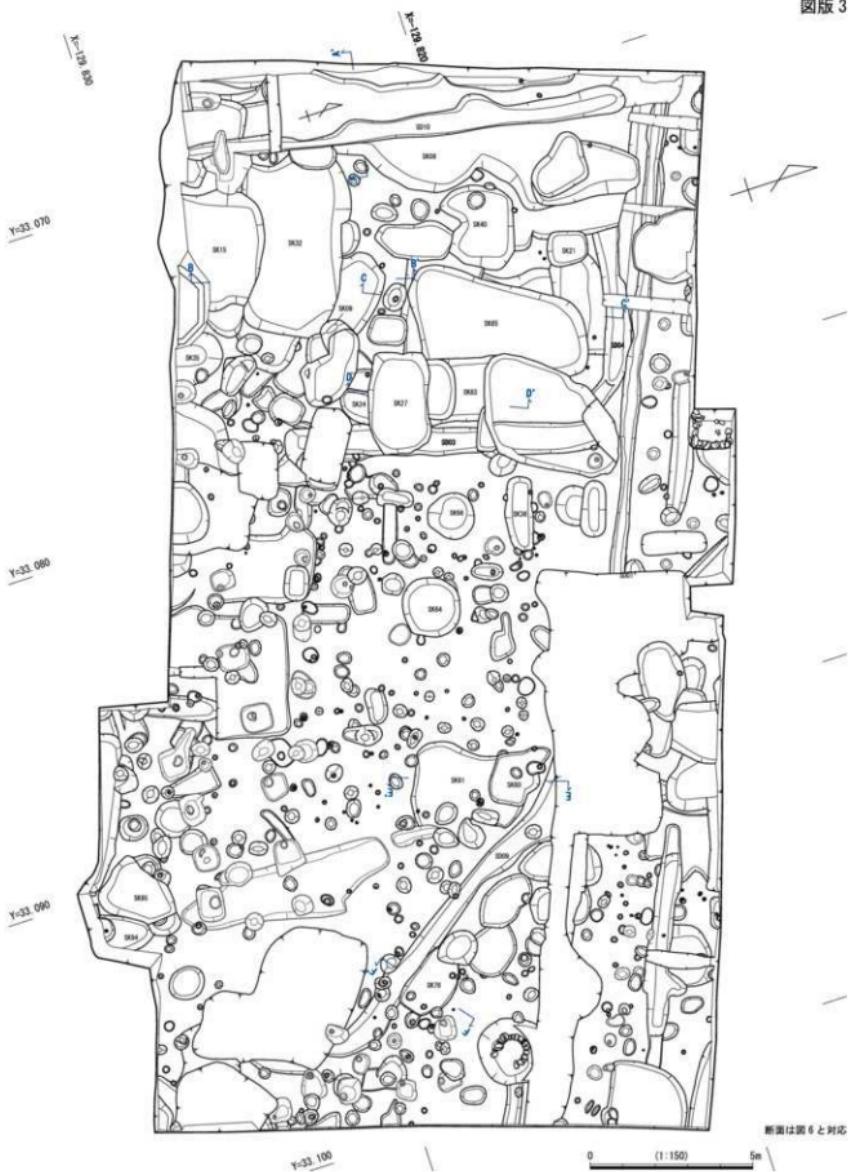


図3 江戸時代遺構平面図

図版 4

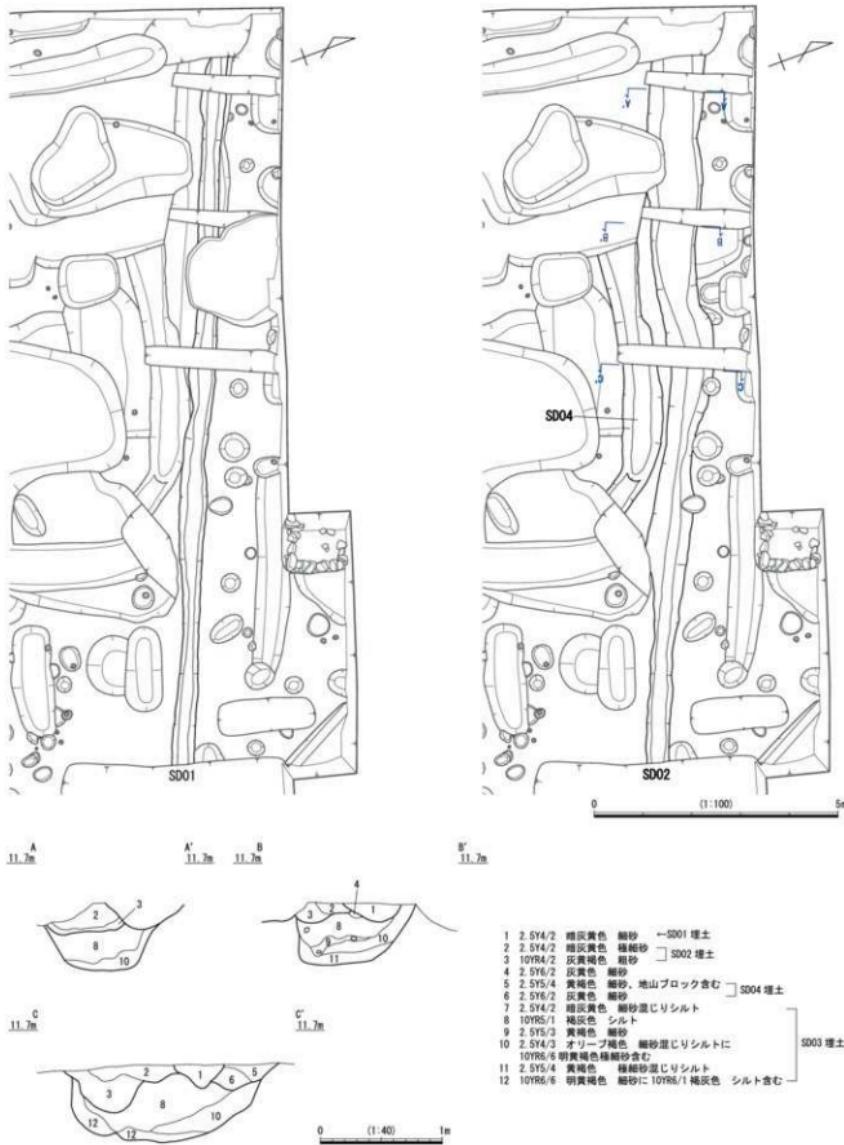
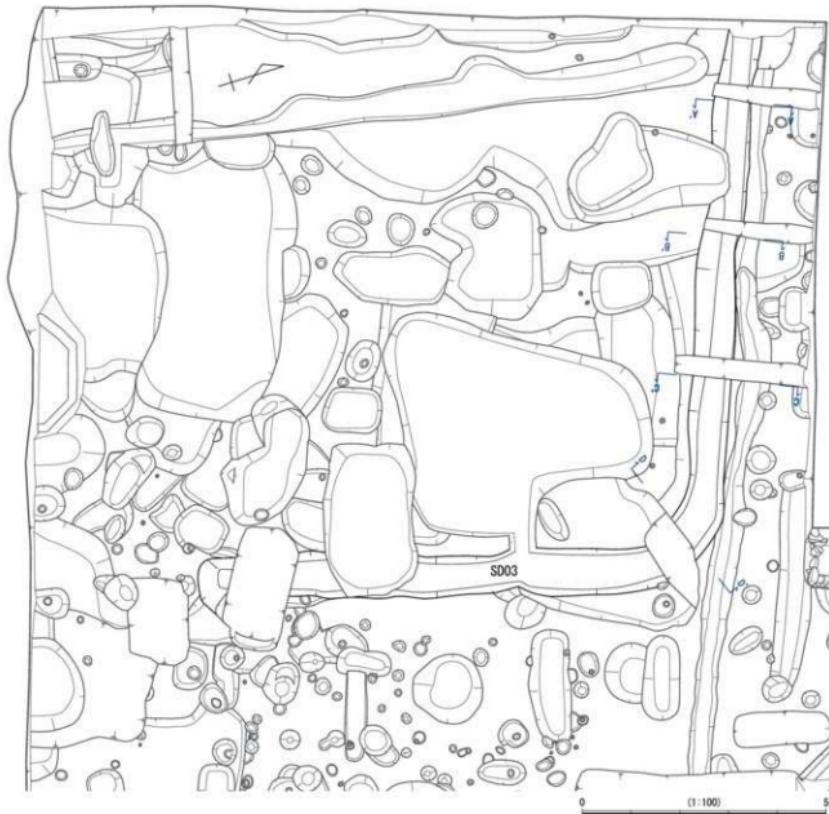


図4 溝 (SD01・SD02・SD03) 平・断面図



A-B・C断面については図4参照

D  
11.7mD'  
11.7m

- 7 2.5Y4/2 暗灰黄色 細砂混じりシルト  
 8 10Y5/1 細灰色 シルト  
 10 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細砂混じりシルトに 10Y5/6 明黄色細砂含む

0 (1:40) 1m

図5 溝 (SD03) 平・断面図

図版6

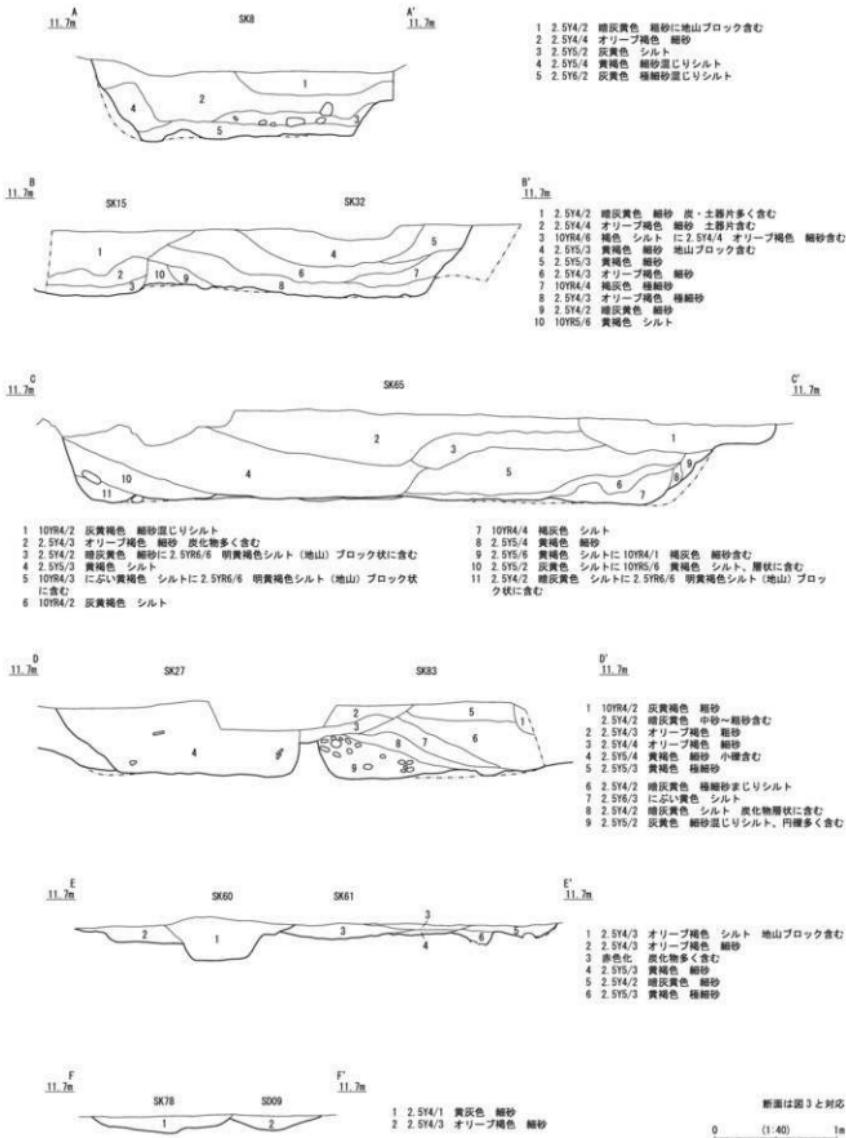


図6 江戸時代遺構断面図

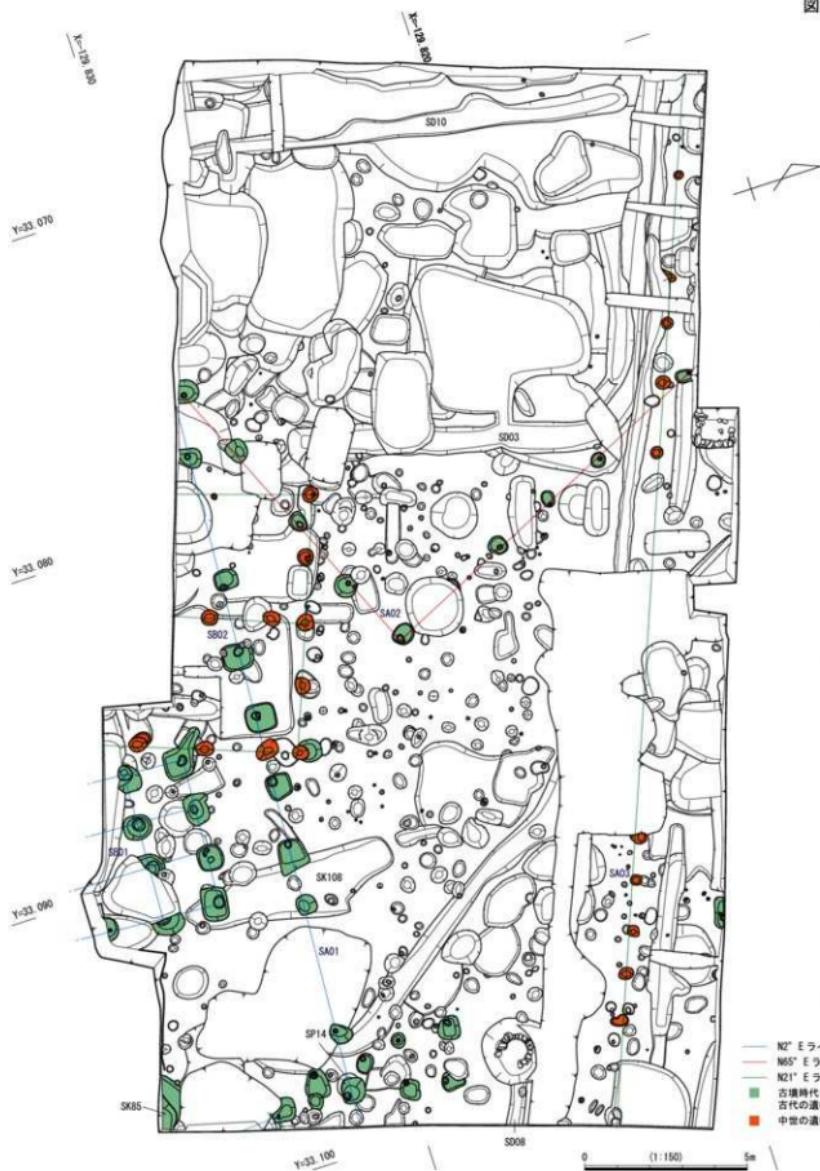


図7 江戸時代以前の遺構平面図

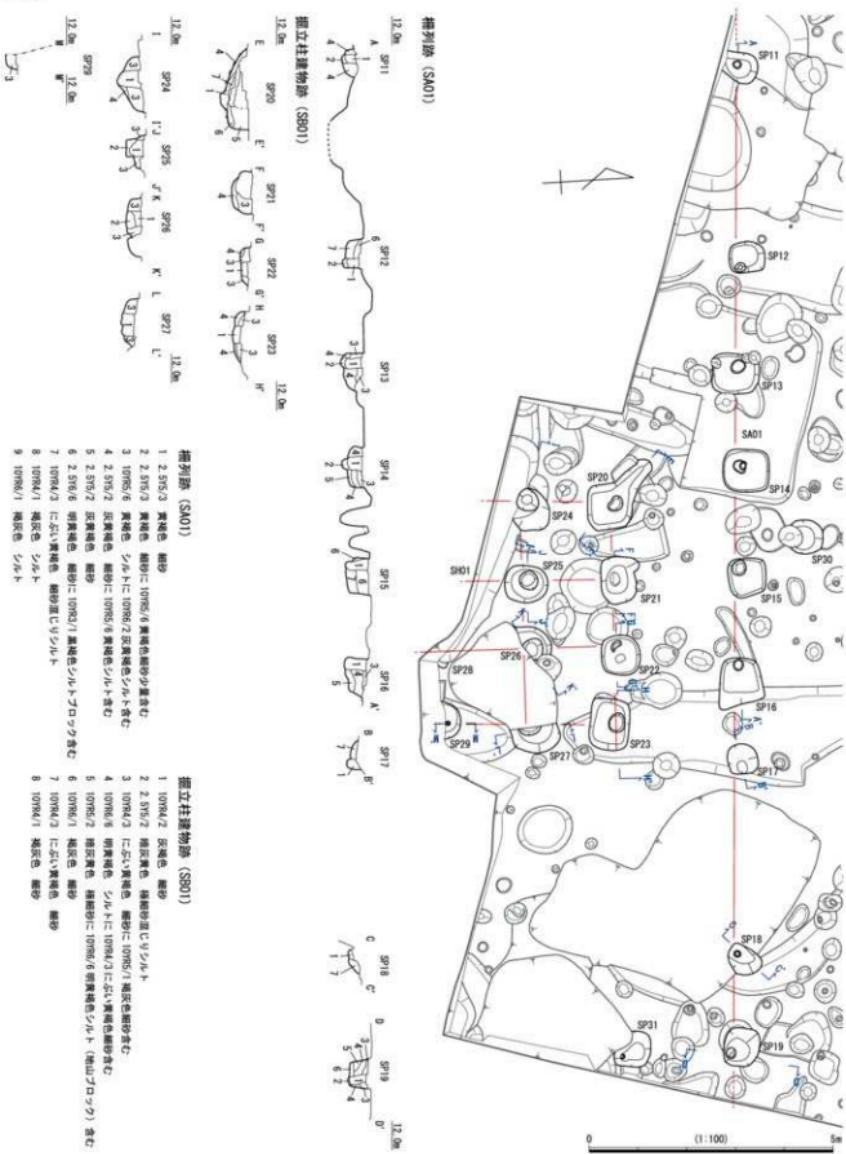
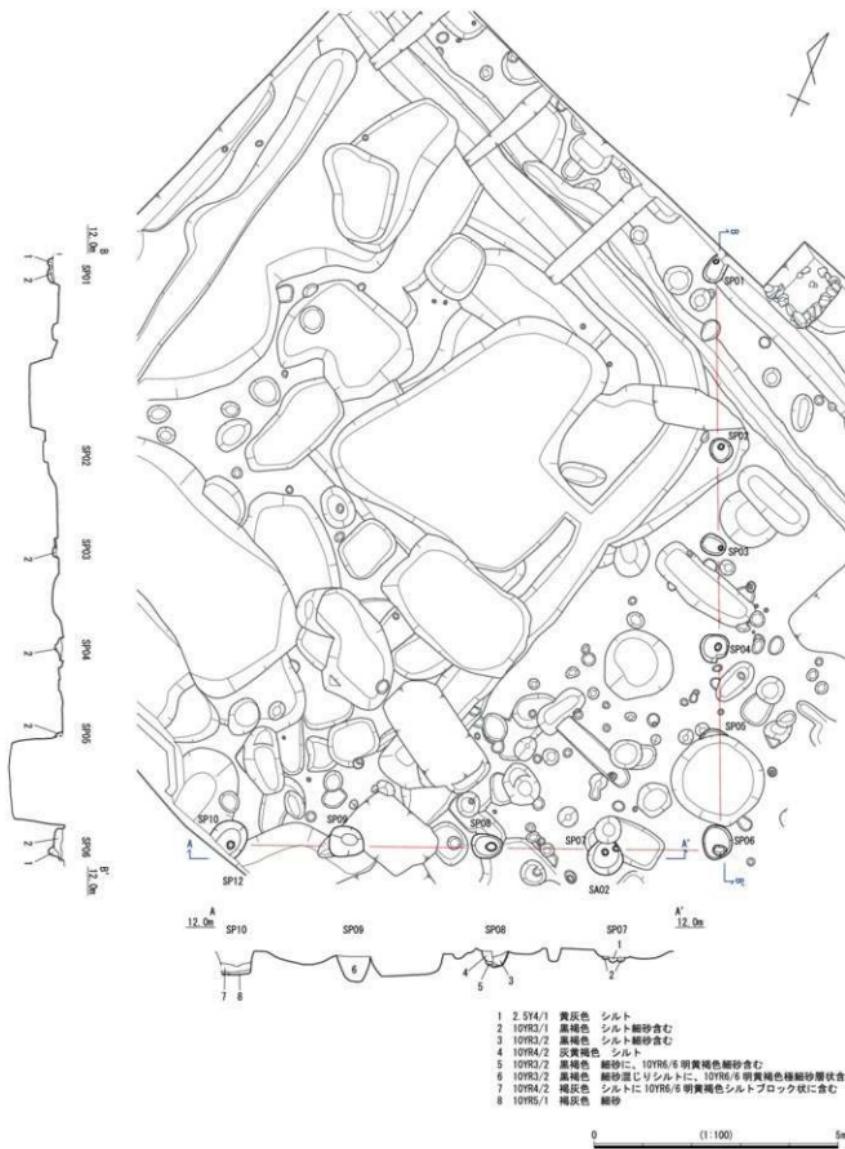


図8 捜立柱建物跡（SB01）・柵列跡（SA01）平・断面図



図版 10

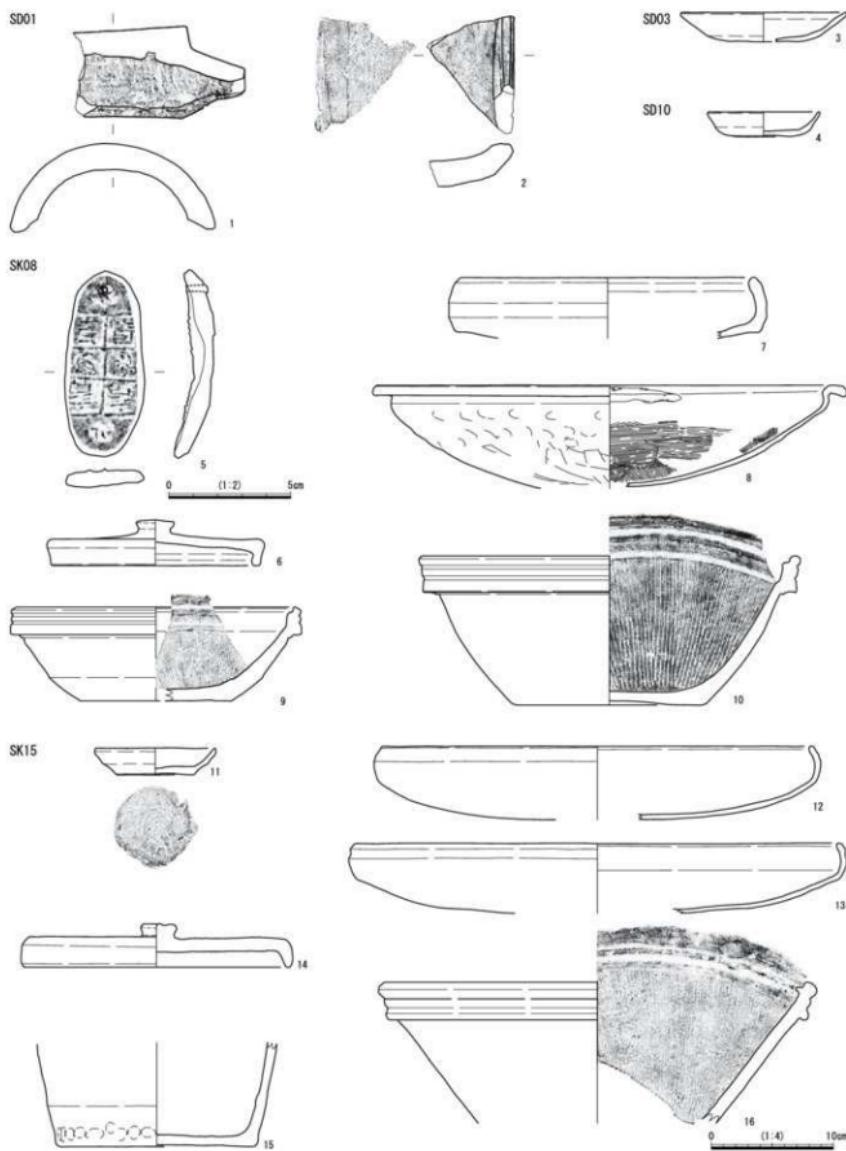


図10 遺物実測図①

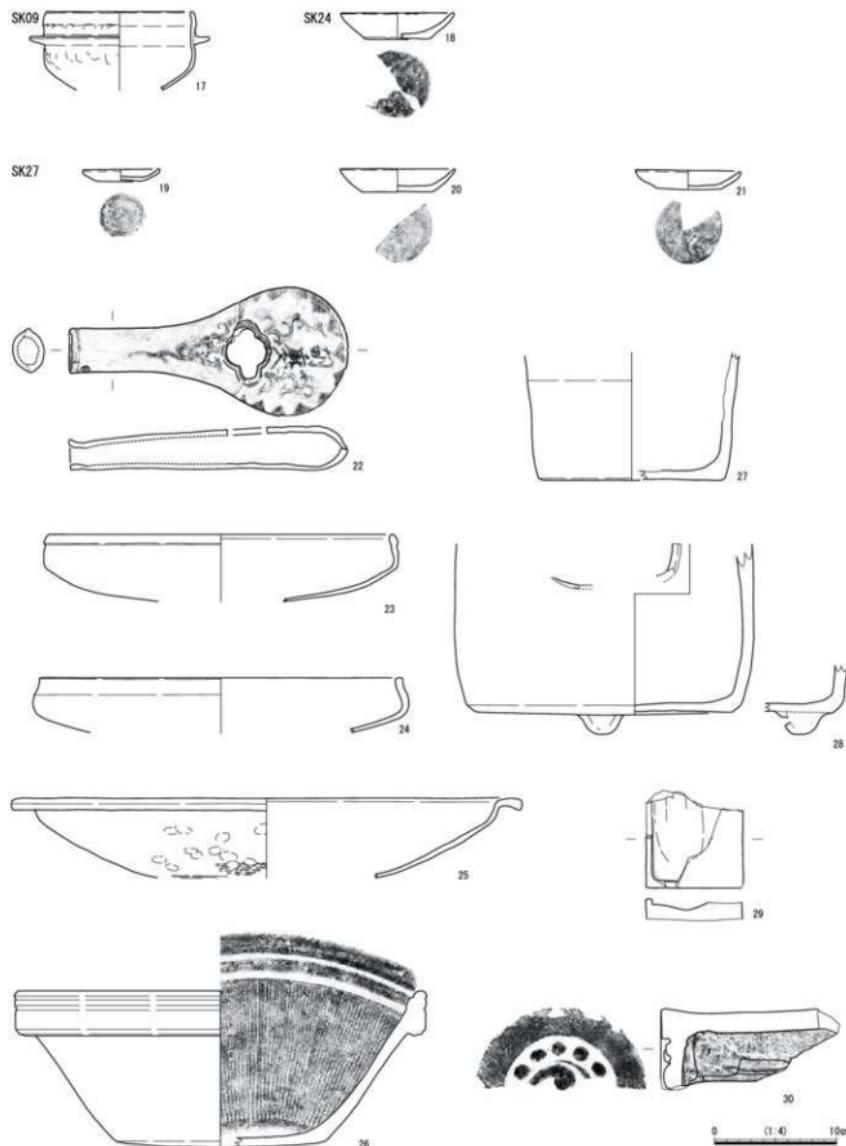


图11 遗物実測図②

図版 12

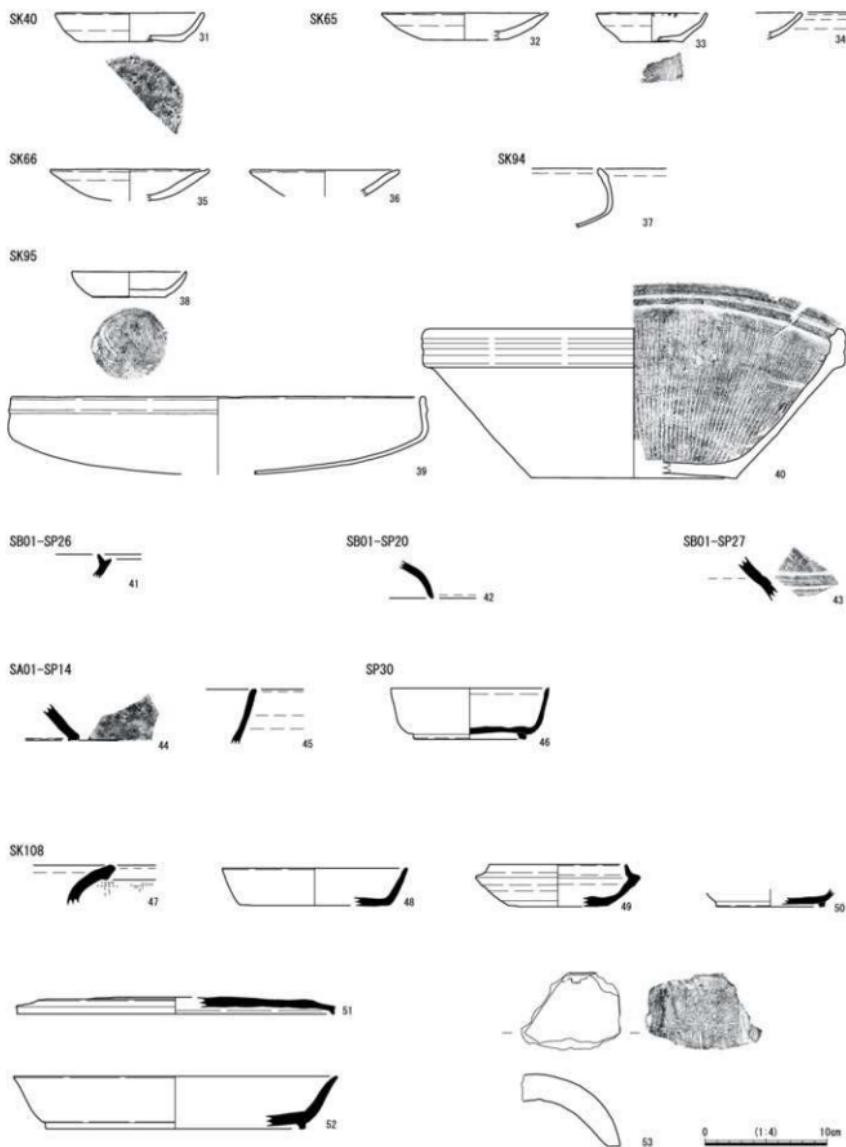


図12 遺物実測図③



写真 1 調査区全景（南東より）



写真 2 江戸時代の遺構完掘状況（東より）



写真3 SD02（西より）



写真4 SD01～SD03 土層断面（A-A'）



写真5 SD01～SD03 土層断面（B-B'）



写真7 SD04 土層断面（D-D'）



写真8 SD10 土層断面



写真9 SK08 土層断面（A-A'）

写真図版 4



写真 10 SB01・SA01 (南東より)



写真 11 SB01-SP20 土層断面



写真 12 SB01-SP21 土層断面



写真 13 SB01-SP22 土層断面



写真 14 SB01-SP23 土層断面



写真 15 SB01-SP25 土層断面



写真 16 SB01-SP26 土層断面



写真 17 SB01-SP27 土層断面



写真 18 SB01-SP28 土層断面



写真 19 SB01-SP29 土層断面



写真 20 SA01-SP11 土層断面



写真 21 SA01-SP12 土層断面



写真 22 SA01-SP13 土層断面



写真 23 SA01-SP14 土層断面



写真 24 SA01-SP15 土層断面



写真 25 SA01-SP16 土層断面



写真 26 SA01-SP17 土層断面



写真 27 SA01-SP18 土層断面



写真 28 SA01-SP19 土層断面

#### 柱痕跡検出状況



写真 29 SA01-SP20



写真 30 SB01-SP22



写真 31 SB01-SP24



写真 32 SA01-SP11



写真 33 SA01-SP14



写真 34 SA01-SP16

写真図版 6



写真 35 SA02(東から)



写真 36 SA02-SP01 土層断面



写真 37 SA02-SP03 土層断面



写真 38 SA02-SP04 土層断面



写真 39 SA02-SP05 土層断面



写真 40 SA02-SP06 土層断面



写真 41 SA02-SP07 土層断面



写真 42 SA01-SP08 土層断面



写真 43 SA01-SP09 土層断面



写真 44 SA01-SP10 土層断面



写真 45 丁銀形土製品 (SK08 出土)



写真 46 SK08 出土遺物



写真 47 SK15 出土遺物



写真 48 SK65 出土遺物

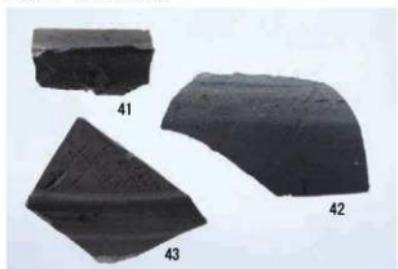


写真 49 SB01 出土遺物



写真 50 SA01 出土遺物



写真 51 SK108 出土遺物



写真 52 石鉄 (SP14 出土)

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと					
書名	姫路城城下町跡					
副書名	姫路城跡第351次発掘調査報告書					
卷次						
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告					
シリーズ番号	第46集					
編著者名	閑 梢					
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター					
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1 TEL (079) 252-3950					
発行年月日	2017年 3月31日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 共同住宅建設
ひめじじょうじょう かまちあと 姫路城城下町跡	ひょうごけんひめじ 兵庫県姫路市 四郷町坂元 北条口二丁目35番地	28201	020169	34° 82' 91"	134° 69' 51"	2016.3.15 ~ 2016.5.27 555 m <sup>2</sup>
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
姫路城城下町跡	集落跡	古墳時代 奈良時代 室町時代 江戸時代	掘立柱建物跡 柵列跡・土坑 柱穴・溝跡	石器・須恵器・土師器 近世陶磁器・瓦		
要約	姫路城城下町における武家屋敷に関連する遺構とともに、屋敷境の可能性が考えられる溝を確認した。さらに江戸時代以前の遺構として古墳時代の掘立柱建物跡や柵列跡、奈良時代の土坑を確認した。古墳時代の遺構は、姫路城城下町跡での検出例は少なく、当地における古墳時代の様相を考える上で貴重な成果を得ることができた。					

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第46集
姫路城城下町跡
平成29年(2017年)3月31日発行
編集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1
TEL (079) 252-3950
発行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地
印刷・製本 内海印刷株式会社
〒670-0808 兵庫県姫路市白国五丁目8-4